

南 紀 貝 信

黒田 徳米・伊藤 恒堂 (†)

Molluscan Shells from Southern Kii

Tokubei KURODA and Kodo ITÔ

(図版 Plates 16—18)

貝類産地としての和歌山県は誠に珍らしい地域である。北方は内海の東の出入口であって、その附近には内海性の貝類（或る意味で、我々は之を大陸沿岸系と云う）が分布するのに反し、日の御崎以南、殊に串本近傍に於いては、極めて著しい黒潮の影響を受けて、南方系の諸種が盛んに棲息する。斯の如き理由によって、紀伊半島は夙に海陸ともに、本邦屈指の豊産地として知られるところである。近年伊藤は此の沿岸に於けるエビ網によって陸揚される貝類の特異性に着眼し、毎年その開拓に苦心、努力を払ったのであるが、その結果、数々の稀品とともに、多くの未記録種も発見されるに至ったので、ここにその著しい一端をご披露するものである。黒田は誘われて、1959年4月、伊藤に伴われて親しく現地の様相を見学し、多大の知見を得たものである。なお本稿は、その年（1959）8月17・18日高野山に於いて開催された、日本貝類学会近畿地区夏の例会の席上、両名によって講演した草稿である。（ヴェキナス第21巻第1号，pp. 109—112 参照）（IV. 15, 1961）。

目次：オガサワラガンゼキとカザリガンゼキ

ミノボラとクダボラ

粗膚クマサカガイ3種

南紀の芋貝類

Conus japonicus の再採集

イトカケガイ類

†) 本名、前 登喜夫、1961年4月16日死亡。
京都大学瀬戸臨海実験所邦文業績 No. 140

Fusinus becki (Reeve)

コウホネ属 3種

Descriptions of new species.

オガサワラガンゼキとカザリガンゼキ

1907 (明治40)年、平瀬与一郎は本邦海産貝類図説 (介類雑誌 1 : p. 20, pl. 2, f. 9) に小笠原母島産の1種を図示し、之を *Murex penchinati* Crosse と同定したが、後ちその然らざるを発見し、改めて *penchinati* を pl. 21, f. 136 で図説するとともに、曩の小笠原産の図に加えて、愛媛県福浦産の別個体を pl. 21, f. 137 に図示し、p. 390 に於いて、これをオガサワラガンゼキと新稱し、その学名は Sowerby の *laciniatus* に近いことを示した。

後ち黒田はこのオガサワラガンゼキが高知・和歌山両県にも分布し、個体は稀れではあるが、もと HongKong 産として報告された、*Murex superbus* Sowerby (1888. Proc. Zool. Soc. 1888 : 565, pl. 28, f. 10, 11) に略々同定し得ることを認めると同時に、平瀬の仮定した *laciniatus* と云うものではないことを知り、貝友の同定依頼にそう答えて今日に至った (参考 : Check List, p. 69. 1952).

その後、和歌山県並に高知県の採集に熱心な寺町昭文氏等が、このオガサワラガンゼキと稱するものに異なる2種の存在することを屢々伝えたが、標本を手にする機会が無く、そのままに過ぎたが、たまたま去る1959年4月下旬、或る要件で黒田が和歌山を訪れることになり、伊藤から、この所謂別型のオガサワラガンゼキの美しい標本を受け、このたび之を詳しく検討することができたが、此の別型と稱するものは、平瀬が最初に疑をもって同定した、*Murex laciniatus* そのものの地方変異型に外ならないことを明かにすることができた。それで、此の名を新に本邦貝類群に加えるとともに、新しく和名を選んで茲に之を御披露するものである。

“*Murex*” *superbus* も本邦産は華南産とは多少相違するが、之を別種と認めることは不適當と思われる。その反面この *laciniatus* もヒリッピン原産に対しては完全な模式型だとは云い得ない。恐らくヒリッピンでは棲息深度

は本邦よりは浅いものと想像されるが、分布上の距たりも関係しての変異に外なるまいと察せられる。“*Laciniata*”は縷状の既唇肋（大山の言う“節”）を示し，“*superbus*”は堂々、荘麗、善美等の意味であるが、この2型の学名と和名とは互に紛れてしまったから、*superbus*をオガサワラガンゼキとし、*laciniatus*に対しては新にカザリガンゼキを新設することにした。飾りは縷をも現わし、この美しい鹿の子模様をも表現するに充分であろうと信ずる。なお小笠原原産の平瀬の標本（介雑，pl. 2, f. 2）は焼失して今は残っておらず、只その粗い図について判断する以外に方法がないが、或はこの四国周辺の*superbus*そのものとも異なる点がないとも限らないが、今は之を追究するにすべがない。

Chicoreus superbus (Sowerby) オガサワラガンゼキ（平瀬）

既唇肋は板状で薄く、全縁に棘列を具え、貝殻には不明瞭な且つ広い赤褐色の色帯が3条ほど現われる。

Chicoreus laciniatus (Sowerby) カザリガンゼキ（新称）*

貝殻螺塔部は肥満し、多少“さいづち”状で、周縁部以上の既唇肋は鈍く、肥大（太く）し、その部分には棘列は殆んど無い。縷状の拡張棘は底部以下の唇肋にのみ発達し、前管側部も拡がり、肋間の瘤突起は強大で円味がある。なお本種には底部の2・3の螺状肋は他のものより強大であることが記述されており、本邦産にも之は明かである。本種の原因には殻口縁がピンク色だと誌されておるが、日本産では白色である。螺頂部紫紅色、殻面は肉肌色で細かい褐色点が螺状脈上に繁く散布する。高さ75、径40mm。残層7。

標本は御坊市名田の海岸海老網に入り、深度は約80mと云うことである。

ミノボラとクダボラ

この2つの和名は、どちらも群分品彙の出となっておるが、岩川（博物館目録：1919年版 p. 160）は、ミノボラは沖縄産で“*Pleurotoma garronsi*;

*）その後出版された松本幸雄編、熊野灘沿岸の貝類（吉野・熊野・伊勢・志摩両国立公園地域拡張調査、1960）pp. 123—148, pl. 1, f. 3 には再び誤って本種をオガサワラガンゼキと図示した。

クダボラは *grandis* (紀伊・土佐) としておる。黒田はその後、この岩川の標本を再調したとき、*garnonsi* は *crispa* Lamarck にあたると手記しておる。然るに之に先立って黒田は“丹浦” [にしきのうらづと] の貝を同定した際、ミノボラは *yeddoensis* Jousseume だとしておる。(Venus, 2 (1) : 25. 1930).

そこで岩川の標本に戻るが、その何れものの中に、今日云うところの *garnonsi*, また *grandis* も無い。要するに彼の考は Tryon の図譜による見解であつたろうと認めるものである。そして我々は此の南方型と日本内地型とは別種だと信ずるものであるが、此の場合群分品彙の内容は、どうであつたかは、よく判らないが、少くとも“丹浦”によれば、ミノボラは *yeddoensis* に当るから、沖縄型の *crispa* Lamarck をクダボラとし、内地型をミノボラの名で区別することが適当だと信ずるものである。両者の区別点は：

ミノボラ *Turris (Lophiotoma) yeddoensis* (Jousseume) はクダボラ *T. (L.) crispa* (Lamarck) に比べて、前管は短かく且つ広い。そして前端部で反曲しておる。各層は円く、多数の等形に近い螺旋脈を繞らし、特に切込帯の下方に於いて著しく、黒色点も多数で群がっておる。また切込そのものも広い。御坊名田海岸産の1標本は13層、82×20mm、殻口の長さ35mm. の大きさを有する。本種は海老網中では必ずしも稀でない。

粗膚クマサカガイ 3種

I. 貝殻は白色.

- A. 臍孔は開き、殻高は殻径の98%。上層は下方の縫合上に強く被ぶさる。底面に輪状紋を有しない。底面の粗糙襞は最も強い。周縁下部に螺旋溝窩を具える。高さ50, 径55mm. チリメンクマサカガイ *konoii* Habe¹⁾.
- B. 臍孔は閉じる、殻高は殻径の80%。上層は下方の縫合を被覆しない。底面に赤褐色の輪状形数条を具える。底面の粗糙襞は前種ほど強くない。周縁下部の

1) 1953. Habe, Illustr. Cat. Jap. Shells, no. 23, p.176, textfigs. 3-5.

溝窩も著しくない。高さ 43, 径 55 mm. シワクマサカ *corrugata* (Reeve).²⁾
(図版 16, f. 12 図).

- II. 貝殻は焦茶色。臍孔は閉じ、殻は甚だ厚い。高さは殻径の 90%。殻口は漆状濃栗色。底面の粗襞は 3 者中最も弱い。周縁下の溝窩も甚だ浅い。高さ 33, 径 38 mm. コゲクマサカ (新種) *torrida* Kuroda & Ito (n. sp.) (図版 16, f. 11 図).

本種は 1959 年出版された吉良氏日本貝類図鑑(改訂第 7 版), 第 14 図版第 7 図に *X. corrugata* (Reeve) の名で図示されておる。西印度産 *X. conchyliophorus* Born は少々近似するが、本種は底面の彫刻の粗雑なことと濃彩の点で著しく異なる。模式標本は多数の円殻を纏着する。

模式産地：和歌山県御坊市名田楠井海岸。(海老網にかかる深度, 60 乃至 80 m.) 分布：高知県, 琉球。

南紀の芋貝類.

日本の貝類研究の進行状態を省みるに、その第 1 楷梯は、世界各地で進んだ道と同じく、潮間帯の棲息者を以って開始されたことは当然で、その第 2 楷梯とも称すべきものは、他邦のそれとは少し変っていた如くである。即ち寺町昭文氏等の努力によって、深底種に非常な努力が払われ、珍稀に次ぐ珍稀と云う諸種の発見となり、その結果、今ではチマキボラ、アザミガイさては多数ヒタチオビ類、オキナエビス等を始め、殆んど数え切れない程のものが、寧ろ普通品扱いされる状態となった。之に反し元来なら、第 2 楷段に来るべき筈の浅い区域に属する底棲種への追究が、少々等閑視されたのでは無いかの観さえあり、今日その第 3 楷梯に至って、之等中深度の海底への探索の手が延びるに至ったのは、少々逆コースかの感さえある。

数年前から此の点に深く注目される所あり、河村良介氏等を始め、関東勢は銚子や相模湾で、魚やヒトデの腹から、西の方ではエビ網等の副産物とし

- 2) 1843. *Phorus corrugatus* Reeve, *Conch. Icon.* sp. 6;
1902. *Xenophora*, 内山, 動雑, 14: 2, pl. 22, f. 2, 3;
1953. Habe, l. c: 176, textf. 6.

爰に図示するシワクマサカの標本は、土佐清水市の黒原和男氏の採集にかかり、珊瑚網にかかったものである。

て、従来多く手にすることができなかつた、数々の種が見出されるに至り、その中には意外な新品の見残しが見付かるという実状に直面しておる。

以下に記述するイモガイ類の未記載種等もその例に外ならない。紀南にはイモガイ類中 *Rhizoconus* (カバミナシ類) に属するものが頗る多いようで、その外観は、殻皮を纏った標本では少々その同定に苦勞があるようである。久しく神田耕一郎翁*)から預ったままになっていた。単一未定標本を始め、今回次々と眼を疑うばかり多種の出現に接した。近来アメリカとの取引が盛に行われる一方、アラフラの真珠漁業などもあって、全く油断はならぬ点もあるが、親しく海岸在住者の手によって次々齎される在肉標本であつて見れば、前にも述べた如く、全くの見残しの宝と評さなくてはならない。爰に至つた御骨折に対し関係者各位に敬意を払うと共に、更に今後に向つて一層の御関心が願われる次第である。

Conus (Rhizoconus) gloriakiiensis n. sp. ミカンイモガイ (新名)

(第17図版, 6, 7図)

一般芋貝形である螺塔の低い倒円錐形、螺塔は少しふくれて持ち上り(但し副模式では寧ろ凹んだ低円錐形をしておる)。両側は殆んど真直であるが、肩部近くでふくれ、その上部は垂直的となる。淡いシトロン色で、極めて淡い2条の淡色帯がある、1条は中央部、他は肩部に、そして全く不明瞭な小赤色点の列が中央帯の上縁に副つて存在する。肩角は波状を呈し、弱い結節は横長に伸びておる。此の特徴は縫合の上方に少し立ち上つた前肩、即ち周縁角の上でも明かである。殻頂は小さく、少し持ち上り多少濃色である。螺層は約4条の糸状脈をめぐらし、彎曲した放射状成長刻脈と交わつて弱い布目状を呈する。殻側は概して平滑、成長脈も弱い、そして距つて巻く弱い少数の螺状糸脈も見られる。底部には弱い縞帯を具え、数条の鈍い螺状肋脈を有する。(模式標本では底端は淡色であるが、副模式標本では該部暗色を呈

*) 高齢ながらかくしゃくたる晩年を楽まれたが、1961年3月5日惜しくも逝去された、衷心から哀悼の意を表する。

する)。殻口は狭く、並行側、咽喉部はシトロン色を帯びた白色、唇縁は薄く且つ鋭い。後部の切込は浅く上縁区を占め外唇の方へ斜に弧状を呈して結ばれる。殻皮は副模式標本に保存されるが暗黄褐色で稍々厚く、密に板状のベルベット状を呈する。そして6条内外の短かい毛状束の列を具える。

高さ 51.7mm, 径 27.7mm, 螺層の数約 11.

副模式標本は 61.2×34.0mm.

紀伊御坊市名田沿岸, 1941年神田耕一郎採集, 副模式1959年5月伊藤恒堂採集.

Conus (Rhizoconus) urashimanus n. sp. ウラシマイモガイ (新名)

(第17図版第13, 14図)

概形上述のミカンイモガイに酷似し、螺層は波状に起伏するが、円錐線は凸隆することなく、扁平状に、或は時に凹んだ低い円錐形を呈する。殻色は暗灰褐色又は赤褐色で口内は淡い^{すれ}堇色を呈する。(少し未成殻の副模式標本は黄褐色で口内は鮮堇色、螺塔は却って陥凹する。周縁の波状感ミカンイモガイよりも弱い。波状隆起(瘤と表現するほど強くない)間の低凹部は栗色を彩る。側壁には1・2条距った栗色点列を具える。(第2副模式では中央と肩部に淡色の広帯をめぐらし、中央帯の後縁部の大小数条の栗色点列を具え、更に検べた他の個体では同色の雲状紋の列を具える)。初層部は突起し、暗褐色を呈する。螺層面には多数の不規則亜方形の赤褐色斑を彩るが、一部は淡色である。各層は4乃至5条の不規則に排列した不等大の螺状糸脈をめぐらし、細かい成長脈で横ぎられ、上層部では布目状を呈する。螺層の数約11、体層側は真直ぐであるが、上部では少しふくれる。表面は平滑で細かく不規則な成長脈を刻み、数条の不明瞭な螺状の凹条を具えるが溝状と表現するほど強くない。底部には6—7条の低く広い螺状肋を具える。縞帯は弱い。殻口は中庸で、両縁は並行的。外唇は薄く、僅かに前方へ曲出する。殻皮は甚だ厚く、暗褐色、密に板状に並び、12条内外に螺列した毛状束列を有する。この束列は時として2条ずつ対列となることがある。

高さ 70.0, 径 37.5 mm (模式, 寺町昭文)

“ 47.8, “ 26.4 “ (第 1 副模式, 未成殻, 伊藤恒堂)

“ 58.5, “ 30.7 “ (第 2 “ 土岐頼三郎)

紀伊御坊市名田下楠井.

甚だ顕著なカバミナシ類で、殻口は董色を呈することが特徴的である。殻形が少々狭長、螺塔に弱いながら瘤列を具える点等も他種と異なる。イボカバイモ *Virgiconus distans* は外見頗る近似するが、螺塔の特質、殻の色彩、並に殻皮の状態が全く異なる。イボカバイモでは瘤は大きく、殻の前端は紫黒色を彩り、螺塔も高い。

Conus (Endemoconus) otohimeae n. sp. オトヒメイモガイ (新種)

(第17図版第8図)

貝殻概形はイナズマアコメ *C. ione* Fulton の未成殻に近似するが、広く且つ短い；そして色彩は甚しく異なる。採集された正副模式標本は小形、さらさらたる色彩を有する。即ち白色系半透明的の表層の下に肉色の内層がかがえる。橙褐色の広い帯が貝の前部約3分の1の所を巻き、その帯は場所によっては大形の雲状彩となる。殻の中央部に褐色点の1列、また広帯の直ぐ上縁部に同色の細小点の2列がある。更にその全面に微小色点列約9条を飾る。その小点列の若干のものは各点白色影を伴うこともある。貝殻底部の螺肋上にある色点はその数は少なく、橙色である。螺塔上には少々大形で不規則形の褐色斑を彩る；殻面は平滑、前端部約 $\frac{2}{3}$ には約12条の螺状溝を具え、若干の溝底は弱い刻点を有する。螺塔は低い円錐形で塔側は少しふくれる。頂部尖り、上層の肩角は前部縫合の上に屹立する。各層は少し凹み、極めて斜めに彎曲した多数の放射刻脈を刻む。頂部近い数層には顆粒列を有する。層数約10；その最頂部1層強は胎殻で、平滑、球状、殻口は少々狭く、外唇は尖縁で、咽喉部は橙肉色。

殻長 27.2, 径 14.0 mm (模式標本, 伊藤恒堂)

“ 25.7, “ 13.2 mm (副模式標本, 土岐頼三郎)

紀伊半島御坊市名田。(分布：模式産地の外、三河一色にも陸揚げされた)。

副模式標本は正模式標本に酷似するが、中央の色帯列は消え、小点列は13条以上に及ぶ。

イナズマアコメ（比較のため、その未成殻を第9図に掲げた）は狭長で、淡青色の色調を具え、色点列は大きく、雲状斑列は赤褐色で、螺層に於ける斜刻脈は甚だ強く、各層の凹みも深い、本種はオトヒメイモガイよりも深海に棲むものの如くである。*

Conus japonicus ニッポンイモガイの再採集（第17図版第10図）

本種は1792年出版の *Ency. Méth. (Vers) (2)*: 710, pl. 330, f. 3¹⁾ に初めて記録されたもので、既に古いことである。此の文献は現在日本で我々は閲覧することはできないが、Kiener はそのイモガイ図説, p. 125, pl. 79, f. 4 (1847)²⁾ に図説しておるので、これによって内容を知ることができた。しかし Sowerby は *Thes. Conch.* などで *C. largillierti* とシノニムであろうと唱え、Tryon なども、これに同じたわけで、半ば葬り去られかけた1種である。

1957年土岐頼三郎氏が辰ヶ浜で1個手に入れられたが、最近更に他の1個を加えられて、黒田へ同定のため提出されたものである。

一見外国種くさい姿をしておるので、一時は米国に関係の多い近頃のことであるから、或はフロリダ辺りのものが誤り伝えられたのではあるまいかと思つたこともあるが、上記の文献を閲覧するに及んで、これが即ち *japonicus* Bruguière だと判つた次第である。概観はヒシイモガイ *C. cancellatus* に近似するが、底部を除いて大体平滑であり、且つ赤褐色の点列と3条の断続

* 第12図に掲げた標本は *Conus (Rhizoconus) okamotoi* オカモトイモガイに当るものと考え、第11図（三河一色揚り）とともに記載する予定であったが、その後標本を紛失したので、ここでは一先づ正規の記述は将来に延期することとした。

- 1) Bruguière, J. G. 1792. Histoire naturelle des vers. vol. 1. In "Dictionnaire encyclopédique méthodique."
- 2) Kiener, L. Ch. 1847. Species général et iconographie des coquilles vivants, comprenant la collection du Muséum d'Histoire Naturelle de Paris, Paris.

帯を具えるから、すぐ区別がつく。爰に本種が名の示す如く邦産であることを確認することができたことは幸である。しかしさほど深海産でもない本種が、何故今日まで再発見できなかつたかは不思議である。Samarang の報告にある *Conus borneensis* Adams & Reeve (1848), p. 18, pl. 5, f. 8 (a—d) もいくらか似ておるが、本種よりは狭長である。

辰ヶ浜の標本は2個とも外形も大きさも略々同じであるが、1方は濃色、他方は少し淡い。重厚で殻口内は微紅白色。36.2×20.2mm. 残層11(+); 34.6×18.9mm. 残層10(+).

原記載の粗訳：“貝殻は拳状、底部溝刻、橙黄色、白色を散らし；赤褐色の断続線で斑彩する；螺塔は尖る。30mm (日本).”

イトカケガイ類 和歌山県の外、高知、神奈川諸県はもとより、一般に我が海岸の浅・深両部に亘って広く、且つ極めて多数の諸種が棲息し、そのうちの大部分は未名種である。之等は将来総合的に取り扱う希望を有するが、今回は図版作製上の序を借って、そのうちの特に大形で著しいもの数種を記述することとした。

Amaea secunda n. sp. ツギノナガイトカケ (新種) (第16図版第6図)

老成貝に於いてもナガイトカケ *A. magnifica* (Sowerby) の半ば前後の大きさで、薄質、彫刻も甚だ細密である。比較のためナガイトカケの未成殻を第7図に示した。殻の概観は両者甚だ酷似するが、大きさの外、縫合は深く、各層は一層強くふくれる。ナガイトカケは臍孔は開かないが、本種では狭いが、明かに開き、灰白色で少々汚れた感触がある。層数11 (その頂部には少くとも3層以上の幼層がある筈。副模式的の幼殻では12層を有し、頂部の1層は胎殻の残部で、光沢のある角質——この頂部にも更に胎殻の初層部がいくつかけしている)。縫合は甚だ深い溝状は呈しない。縫合の上下部では絲懸け脈は保存されておるが、極めて繊細である。表面は多少光沢を有し、螺状脈は頂層部では弱い、漸次下層で明かとなり、次体層では約28条を数え、縫合の前部には之を欠ぐ。螺状絲脈は交互に大小、或は脈間の小間脈2条と相

並ぶ；体層の前部で底面への移行部（外唇上縁が体層での挿点の延長線上）には他のものよりも強い1糸脈があり，それと臍孔縁までの底面の螺状脈は漸次弱化する．縦糸脈は幼層部を除き概して弱く，その存在した跡は多少溝状に掘れ込んでおる．体層の終末部には旧外唇襞が5～6条の強肋として残る．殻口は短卵形で，上部広く下部は少し狭まる．唇縁は狭く鈍い円味ある肋として反曲する．体唇壁縁を除き略々完縁である．軸唇は弱く彎曲し，その外部に極めて僅少の縋帯部を形成する．臍孔は狭く斜に透孔する．蓋未詳．
高さ 59.0, 径 21.2mm, 殻口 15×12mm.

” 30, ” 13.7mm (副模式, 未成殻, 殻口縁未完成).

ナガイトカケは特に比較のため，その未成殻の図を掲げたが，概して光沢の無い灰白色で，縫合は浅く，螺層のふくらみは弱く，縦状の糸脈は随所に著明で，螺状脈も顕著で且つ少数（この個体では次体層に18条，縫合前部にも存在する），底面を限る螺状肋も著しく，その下部（底面）の螺状糸脈も粗い，殻口も幾ぶん狭長．この標本の寸法は40.5×17.5, 殻口13.8×10.0mm, 10.5 螺層である．

本種は *Amaea* 属中の第2位の大きさを有する逸品で寡産，殻の概観は寧ろクリンイトカケ *Amaea thielei* に近似するが，薄質，幅広で，彫刻も異なる．紀伊水道（詳地未詳），神田耕一郎採集，1949年8月．

Cirsotrema (Elegantiscala) rugosum (A. R. Cahn, MS.) n. sp.

ヤエバイトカケ（新種）（図版 Pl. 16, fig. 8）

1958. *Epitonium (Cirsotrema)* sp. Ozaki, Bull. Nat. Sci. Mus. 4 (1): pl. 15, fig. 27.

1959. *Cirsotrema (Elegantiscala)* sp. Kira, Col. Illustr. Shells Japan, 7th Edit. p. 32, pl. 13, figs. 17 (2 figs.)

狭長であるが，イトカケガイ科中にあるには最も重厚，荘麗な一種である．上に引照した如く，和名は以前から定められたが，種名の発表は終っていない．戦後 Dr. Cahn が我が貝類を盛んに求めた折，彼の案出した種名である．狭塔状，大形，冴えない灰白色；全層に亘って密縮した部厚い縦襞板を

密接に具える。縦板は前方後退の斜襞で体層上に19条あり、縫合の前部に著明な肩棘を具えて角立ち、体層の下部に底面盤を具え、その外縁は稜角で限られるが、凡て縦板の間であって、決して之を横切ることはない。縫合は深い、接続し、その前部肩棘との間の板肋は屈曲する。螺層の数11で、頂部は蝕損して保存されない。縦板間の殻膚は略々大小交互の螺状絲脈を密刻し、その数底盤までの間に18条内外を数えるが、縫合前部及び底盤上では細脈が之に代わる。臍孔は開孔しないが、太い螺状索之を取り巻く。殻口は卵状円形で、最終の板襞之を囲み、広く拡張する。完縁で、軸唇前端は前方へ拡がる。各層に1乃至2条の厚縦板を具えることがあるが、之は過去に於ける期間の長い時の外唇縁を示すものである。蓋は漆黒、無光沢、短卵形、寡旋(5—6層)。

長さ 61.0, 径 21.0mm, 殻口 10.5×10.0mm.

模式産地, 土佐沖 (寺町昭文採集), 分布: 紀伊沖.

“*Scala*” *fimbriata* A. Adams は近似するが、該種は小形で肩棘列は縫合部へ近寄り且つ弱く、底盤は狭域を占めるに止まる。*S. trabecula* A. Adams も近似するが、後者は肩棘を具えないものの如くである。

Teramachiacirsa annulata (gen. et sp. nov.) テラマチイトカケ
(新属新種) (図版 Pl. 16, fig. 9).

地中海沿岸地帯に普通な陸産ヤマタニシ類 *Pomatias* に似通う貝殻を有する深海系のイトカケガイ科の1員である。卵状円錐形、薄質、臍孔開き、螺層は急激に増大する。螺層の数7, 頂部小さく半透明、褐彩、平滑; 各層よくふくれ、縫合は深く、僅かに溝状を呈する。淡い肉色を帯びた紫褐色、螺頂部と底部とは帯白色。成長刻脈に横ぎられて少々粒状に乱れた螺状脈を密刻する。上層部では両脈交わって布目状を呈するが、老成層では螺脈が優越し、更に間脈を生じて、その排列は不規則となる、次体層上では主脈は12条、体層上では主従乱れて数え難い。殻口は卵円形、唇縁は体壁上で遮られ、外唇は簡単で薄い; 軸唇縁は反曲し、臍孔の一部を覆う。

高さ 14.6, 径 11.9mm.

模式産地：土佐沖，寡産。寺町昭文氏初めて之を採集したが，茲に記載する模式標本は黒原和男氏の寄贈にかかる。

縦襞を欠き，螺状脈を具える未知の1群であるが，*Acirsa* 系のイトカケガイの1員と認める。蓋及び動物体の検査を必要とする。

Lampropalia nitida (gen. et sp. nov.) ミガキイトカケ (新属新種)

(第16図版，第10図)

珍しい形のイトカケガイ科；最初之を手にしてから久しくその所属に悩んだ1種である。その理由とするところは，殻外形とその大きとは恰もトウガタガイ科中のイトカケギリ類 *Turbonilla* に極めて近似するためであった。特に動物の保存された標本が少く，殻頂部の蝕損と相俟って蓋などの実体も未詳であった結果であったが，漸次その様相が明かとなるにつれ，茲にイトカケガイ科中未知の1属であることが明かとなった。之等の資材を多く恵贈された寺町昭文氏に深謝するものである。

貝殻小さく，針状塔形，光沢強く輝き，縫合は深いが，縁取りとなり，各層はふくれるが，上下の縫合部で強くくびれ，幼若部では切子状を呈する。多数の縦襞を具え，襞間は襞肋よりも広い。縦襞は老成層では単純な円肋であるが，初層部では上下2粒の連続肋状を呈し，タケノコガイ科中に屢々見られる形状を呈する。胎殻は2層強の円筒形を呈し，その縫合は深く，イトカケガイ科一般の形状を呈する。新鮮貝殻は半透明，角質状褐色。体層には広い底盤を具え，その外縁は稜肋状を呈する。縦肋はこの底縁肋に遮ぎられて，底盤上には達しない。殻口は方形円で，唇縁は薄く簡単に体壁上では薄い滑層によって連らなるのみである。軸唇縁は反曲し，少々厚く，臍部は滑層で広く被われる。蓋は短い卵形で，寡旋，透明角質，周縁は褐色でへりとりとなる。

高さ15.2，径4.3mm，螺層の数 $11\frac{1}{2}$ （模式標本）。但し老成の副模式標本中には遙かに大成し 25×6 mm.，残層14に達するものも少くないが，多くは甚しく蝕損を受けておる。

模式産地，土佐沖．寺町昭文採集．

分布：五島の南方，深度 549m．砂質泥，から土佐沖，紀伊半島沖に及ぶ．

Siboga 探検で採集された *Scala humerosa* Schepman は少々類似性を有するようであるが，肋の様相は異なる．

Fusinus becki (Reeve) サイツチナガニシ (新名)

今一つ別なナガニシの新記録が生れた．去る1959年5月黒田が，採集界の奇才，寺町昭文氏を訪ねた時のこと，体層が甚しく肥大しておるのに反し，前溝は極めて狭く，殊に著しく屈曲しておる白色の1ナガニシを示し，“これは何であろうか”との質問を受けた．標本を申受けて帰り，図譜類に照した結果は上記の種に同定できることを知った．Reeve の標本には産地は未詳とされてあるが，このような著しい才槌形の様相は明かに表現されておる．この貝は1847年発行の *Conch. Icon. sp. 34* に Beck の MS. 名だと云う *ventricosus* として記載されたが，後この名は Gray に先取の同名があることが明かとなって，1848年に，同図譜 *pl. 17* に改めて別名 *beckii* を提出し，ここで，今一つ他の標本を *fig. 34b* として図示した．日本産の貝は純白，黄色の毛状殻皮を被っておる点はハシナガニシ *F. longicauda* に似るが，縦肋を有し，鋭い多数の螺脈をめぐらし，体層を最とし螺層が著しく肥大しておる．之に反し前溝は甚だ細く，ハシナガニシのように長くなく，蛇行状に屈曲しておる，一見不安定感を抱くものである．西部紀伊60メートル内外産と云う．愛知県一色へも水揚される由である．長さ13，径4cm．標本によって今少し幅の広いものもある．9層残っておるが，見た何れの貝も胎殻は保存されてなかった．

コウホネ属 3種

Meiocardia は3種の如く，印度太平洋に普通だと云う *vulgaris* (Reeve) は未だ知られない；Lamy (1920) は本邦のカノコシポリコウホネは *moltkiana* (Spengler) と異り，Dunker の提唱した *sanguinomaculata* と云う亜種に区別したらよいと述べたが，Prashad (1932) は之に反対しておる．

このカノコシボリコウホネとテリコウホネとは標本が一番少く、普通コウホネは今では寡産とは云えなくなった。Prashad はコウホネは稜角も鈍く、後端の尖りも弱いと述べておるが、我々の見る標本では、稜角、後端ともに頗る鋭どく、以って Prashad の Siboga の標本は日本産のものとは違う。なお *tetragona* の模式産地は“日本”であり、その原図並に記載によく合うから、此の場合 Prashad の貝は少し違ったものだと云うことができる。3種の検索表：

- A. 貝殻不透明、稜角は前後縁は凹んで甚だ鋭どい。
- a. 成長肋脈粗く少数、貝殻は短かく、後腹隅は尖らない。紫褐色雲状斑、又は血紅色々点。カノコシボリコウホネ *moltkiana* (Spengler)
 - b. 成長肋脈は密接し多数；殻は長く、後腹隅は尖る。淡黄色、後区はボタン色 (red)。コウホネ *tetragona* (Adams & Reeve).
- B. 貝殻は半透明、稜角の後縁は凹むが、前縁は凹まない。肋脈は少数で粗。橙紅色斑。後縁は亜垂直。テリコウホネ *lamarcki* (Reeve)。又別の特徴で云えば：
- I. 殻の前端は短かい；[高く、亜方形的]。
- a. 貝殻は厚く、稜角の前後は凹む。肋は最少数。不透明黄色、紫褐斑又は血紅点。後端3者中一番短かく、腹縁後端は彎入する。(カノコシボリコウホネ)。
 - b. 貝殻は薄く、稜角の前縁は凹まず、後縁のみ掘れ込む。肋脈は太いが、3者中中位、腹縁後端部彎入しない。(テリコウホネ)。
- II. 殻の前端は長く、楕円卵形—長い、稜角の前後縁は凹み、不透明、肋脈細密。後縁は延長し、腹縁後部彎入する。(コウホネ)。

Descriptions of new species.

Xenophora torrida, n. sp. Plate 16, fig. 11. コゲクマサカ (新種)

1959. *Xenophora corrugata*, Kira, Col. Illustr. Shells Japan,
7th edit. p. 34, pl. 14, fig. 7. (non Reeve).

Shell medium, very thick, burnt brown; the height pertaining 90% in the diameter; umbilicus nearly closed; basal sculpture very rugose, yet weaker than those of *X. konoii* Habe and *X. corrugata* (Reeve) (the view of the latter is shown in the fig. 12), the radials are precedent over the spirals and bear several small nodulations on some larger ribs; the infra-peripheral depression (on the base) rather shallow; aperture dark

chestnut brown and vernicose.

Height 34, diam. 38 mm. (type).

Nada, southwestern coast of Kii Peninsula, collected with lobster fishing nets. Several small pebbles with very few fragments of shells are glued on this specimen. This species occurs also in the Ryukyus.

Atlantic *X. conchyliophora* (Born) somewhat resembles this species but differs in the finer basal sculpture and paler coloration.

There are smaller races (male?) of *X. pallidula* (Reeve) in our seas with a brownish base, but easily differentiated by the finer sculpture with a thin shell structure and a white aperture.

Comus (Rhizoconus) gloriakiensis, n. sp. Plate 17, figs. 6 and 7.

ミカンイモガイ (新種)

General shape of shell is of a normal *Comus*, with a low spire, which is slightly convex (in the type, but in the paratype, it is slightly concavely erected), lateral sides nearly straight except the upper part which is convexly vertical; pale citrinous, with two very feeble pale zones, one at the center, the other at the shoulder, and a quite indistinct row of small red spots at the superior margin of the central zone; shoulder angle wavy, with a low row of subcoronated, transversely elongated swellings; they are also seen on the former angles which are slightly raised at the sutures on the spire; apex small, raised a little, somewhat darker; whorls spirally striated with about 4 threads, weakly cancellated by crossing of the rather indistinct but arcuated radial striae; lateral sides generally smooth, growth striae weak, with a few indistinct distant spiral threads; base with a weak fasciole and several blunt spiral ribs. Though the basal portion of the type specimen is paler in coloration, but in the paratype it is stained dark and with a more distinct fasciole; aperture narrow, parallel-sided, throat whitish with a pale citrinous hue, peristome thin and sharp; posterior notch is shallow, occupying the whole posterior margin with an oblique arc towards the outer lip. Periostracum dull yellowish brown, rather thick, densely and velvety laminated with 6 or more distant series of short bundle-like

thickenings.

Alt. 51.7, diam. 27.7 mm, whorls about 11 (the type).

Alt. 61.2, diam. 34.0 mm, (paratype, spire concavely ascending).

Nada coast, Gobô, Kii Peninsula, collected by the late K. Kanda. The paratype specimen was also from Nada by K. Itô.

Conus (Rhizoconus) urashimannus, n. sp. Plate 17, figs. 13 and 14.

ウラシマイモガイ (新種)

Strongly akin in form to *C. gloriakiensis*, just described above, but the spire flattish or rather concavely erected, with the coloration of dark grayish brown, with a pale violet throat (in an immature paratype the shell is violet brown in colour with the aperture in clearer violet hue and a rather sunken spire); wavy nature of the peripheral swellings weaker, with chestnut stain between the nodules, and one or two distinct series of small chestnut spots in spiral manner; spire flattish but the earlier volutions are slightly elevated with a pointed apex, which is darkly brownish; the spire is paler in coloration but ornamented with numerous, irregular, and subsquare reddish maculations, some of them are darker but the other paler; suture wavy by the subnodulous previous angles, and very slightly raised over the inferior suture; on the spire whorls there are 4 or 5 unequally spaced and unequally sized spiral threads which are crossed by fine growth striae, which make the surface fine reticulations. Whorls about 11, lateral sides of the last whorl substraight with a slight convexity above; surface smooth, with fine and irregular growth striae, and several indistinct spiral depressions which can hardly be expressed as groovy; on the base 6 or 7, stout but low spiral ribs are encircling; fasciole rather weak; aperture moderate, with a thin, slightly arcuated outer lip. Periostracum very thick, dark brownish, densely laminately imbedded with 12 or more spiral rows of hairy bundles, the rows encircling in pairs in places.

Alt. 70.0, diam. 37.5 mm. (type, collected by A. Teramachi, which

belongs to his collection).

Alt. 47.8, diam. 26.4 mm. (paratype, rather immature, 10.5 whorls).

Nada, Gobō, Kii Peninsula, the immature paratype was collected by K. Itō in May 1959.

A very remarkable *Rhizoconus* differing from all other members in the slenderness in shape, violet aperture, weakly coronated spire and the peculiar coloration. *Virgiconus distans* is allied with this species in shape and coloration but differs in the characteristic shape of spire and the nature of the periostracum; the nodes on spire of *distans* are bigger, the base of the shell is violet black, and the spire is higher.

("Urashima" is a hero who was welcomed by the Princess of Dragon's Palace in a Japanese fairy tale).

Conus (Endemoconus) otohimeae n. sp. Plate 17, fig. 8.

オトヒメイモガイ (新種)

Shell resembling in shape with an immature specimen of *C. ione* Fulton, but broader and shorter in proportion, with a different nature of coloration. Small but brilliantly colored: whitish, through the outer layer a fleshy inner layer can be seen; a broad band of orangy brown at the lower third of shell, the band broken into some large cloudy spots in places; and a series of brown spots at the centre; there are also two series of much smaller spots of same coloration at just above the inferior broad zone; and moreover, the whole surface ornamented with about 9 series of minor spots; some series consisting of very small spots; every spot accompanied with a white shade; another series on the ribs at the basal end are scarce in number and of orangy colour; on the spire rather large russet maculations of irregular shapes. Surface smooth, on the inferior two-fifths there are about a dozen number of grooves, some of which are punctured but weakly engraved. Spire low conic, very slightly convex, apically pointed, with previous shoulder angles standing erect a little above the sutures; whorls shallowly concave, engraved with very obliquely arcuated, numerous radial striae;

several early post-nepionic whorls are granular, number of whorls 10, apical slightly more than one volution being the protoconch, smooth and globular. Aperture rather narrow with a sharp edge of outer lip, throat fleshy orangy.

Alt. 27.2, diam. 14.0 mm. (type, collected by Kōdo Itō).

„ 25.7 „ 13.2 „ (paratype, collected by Y. Toki).

The paratype specimen, very similar to the type, excepting only the faded central series of spots but with more (about 13) series of minor spots.

Nada, Gobō, Kii Peninsula. It occurs also in the south-east coast of Kii Peninsula, the habitat seems to be slightly shallower than that of *C. ione*, whose depth is said to be 100 meters or more.

Conus ione Fulton differs in the elongated shell with a pale violet hue, the serial spots of that are larger and the zones of cloudy spots are of reddish brown, with sharper radial striae in the spire whorls which are stronger. In comparison we are giving an immature specimen of it in the figure 9 on the plate 17.

(“*Otohime*” is the name of Princess of Dragon’s Palace in a Japanese fairy tale).

Amaea secunda n. sp. Plate 16, fig. 6. ツギノナガイトカケ (新種)

Compared with the magnificent Scala, *Amaea magnifica*, this species is smaller, less than a half in length, though in a fully matured condition, and shell thinner, finer in sculpture, for comparison we gave a figure of an immature specimen of the former in the plate 16, fig. 7. In this new species the suture is very deep but not canalculated, more convex in whorls, with a narrowly perforated umbilicus; grayish white; whorls 11, several apical ones decollated; very thin axial laminae are preserved in the areas adjacent to the suture of the later whorls, but generally wanting on the convexities, they are also on the earlier whorls more distinctly preserved; surface slightly shining; there, on some later whorls, bearing very low, wide and rounded rib-like swellings

which indicate the former intercostal spaces of the rubbed laminae; spiral threads weak on the upper whorls but gradually stronger later; they are about 28 on the penultimate whorl, but wanting on the area in front of suture; these spirals are alternately large and small, or a pair of smaller ones between the larger ones; there is a slightly stouter one bordering the base of the last whorl; the base is convex, on which much weaker spirals are encircling; on the last part of the last whorl, there are several stronger axial ribs which indicate the former varicial outer lips. Aperture shortly ovate, slightly wider above; peristome narrowly reflected and thickened outside with a rather stoutish rib; parietal margin covered by a thin callus; columellar margin somewhat arcuate, covered by a white callus, forming a trace of fasciole. Operculum was not preserved.

Alt. 59.0, diam. 21.2 mm., aperture 15.0×12.0 mm.

Coast of Kii Peninsula, collected by the late K. Kanda, a famous old collector in that region.

Amaea magnifica (Sowerby) has a larger shell without gloss of surface, stronger spiral threads and an imperforated umbilicus; it attains more than 120 mm. in length when fully matured.

Cirsotrema (Elegantiscala) rugosum (A. R. Cahn, MS.) n. sp.

ヤエバイトカケ (新種) Plate 16, fig. 8.

1958. *Epitonium (Cirsotrema)* sp. Ozaki, Bull. Nat. Sci. Mus. 4(1):
pl. 15, fig. 27.

1959. *Cirsotrema (Elegantiscala)* sp. Kira, Col. Illustr. Shells Japan,
7th edit. p. 32, pl. 13, figs. 17 (2 figs.)

Slender but thickish large Epitoniid, with a splendid shell structure; dull white without gloss, whole surface densely provided with numerous rather thick fimbriated axial ribs, which are about 19 in number on a whorl, each rib is stout, sharply aculeated or pointed on the shoulder; closely fimbriated and the margin is piled over another (by the laminae, number 5 to 10 or more), reaching below to the stout fasciole which

borders the closed umbilicus; some of these ribs are stouter than others in the whorls; intercostal spaces are excavated and much wider than the ribs and rugosely striated with spiral threads, which are alternately large or irregular in size; they are stouter than the interstitial grooves; furthermore, there are finer spiral striae covering the whole surface; on the area in front of suture there are only the latter striae but no stouter ones are provided; on the base there is a high, thickish spiral rib surrounding the base, which forms the basal disc. Number of whorls 11, the apical ones are generally defective; suture is deep, weakly pitted between the ribs. Aperture holostomate, shortly ovate, outer lip very strongly varicose with a point above, dilated below on the base of the columella. Operculum blackish, rather thick, paucispiral, with a subcentral nucleus.

Alt. 61.0, diam. 21.0 mm., aperture 10.5×10.0 mm.

Type collected by A. Teramachi in Tosa Bay, also distributed in seas off Kii Peninsula.

"*Scalaria*" *eximia* Adams and Reeve resembles in form, but has a smaller shell (viz. 8mm with 10 whorls), with no basal disc.

Teramachiacirsa annulata, genus and species new. テラマチイト

カケ (新属・種) Plate 16, fig. 9.

At a glance it recalls us of an European land snail, *Pomatias*, but is a deep benthic form of the Epitoniidae; shell ovate conical, rather thin, umbilicate; whorls rapidly increasing, about 7 in number; apical volutions subtransparently brownish and subcylindrically conical; nepionic whorls spirally lirate with 3 or 4 interstitial minor threads in the spaces, growth striae are very fine between the interstitial spaces, forming the surface subreticulate appearance, but the spirals being predominant in all stages; on the early nepionic whorls there are about 7 of the lirae which are unequal in size and in their arrangement; the main ribs may be counted 17 or 18 on the last whorl, with about 4 minor ones on the umbilical wall; the surface slightly shining, coloration

fleshy purplish brown in the type, but in the paratype specimen it is brownish corneous or dull orangy brown, somewhat whitish towards the lip, base and earlier portion of the nepionic whorls; suture deep, subcanaliculate and slightly tabulated in front. Aperture roundish ovate, lips interrupted on the parietal wall; the outer margin sharp and simple; columellar margin half covering over the umbilicus by the reflected margin; basal margin slightly dilated below.

Alt. 14.6, diam. 11.9 mm.

Type locality: off Tosa Bay, very rare.

An interesting problematic member of *Acirsa*-group in the Epitoniidae with no axial ribs. A new genus is here established with this unique species as the type, and a study of the animal and operculum is strongly desired for the decision of its generic position.

Lampropalia nitida, genus and species new. ミガキイトカケ
(新属・種) Plate 16, fig. 10.

Another interesting new group among the prosperous representatives of the Japanese Epitoniidae. Shell shape and its size remind us of a *Turbonilla* of the Pyramidellidae, but the shape of the protoconch and the opercular characters clearly reveal that this species belongs to the former group.

Shell rather small, somewhat subulate or slenderly pyramidal, very glossy, subtransparently corneous when the specimens are fresh; plicate with numerous blunt axial ribs with wider interspaces; the suture deeply constricted and margined above; the ribs are vertical, simple and roundish on the later whorls, but angular above and below on the earlier whorls; the angulations are due to the two pointed nodes: each rib diminishes on its superior and inferior ends or nearly obscured at the sutures; protoconch is rarely represented as the earlier whorls and generally badly eroded in the matured specimens, so that the exact nature of it can hardly be observed; a very young individual we succeeded to observe it, though even in this young shell it was partly eroded and

wanting the extreme tip already, furthermore, its periostracum was already lost by erosion, showing an opaque chalky matter on it; it is one and a half whorls, subcylindrical, the extreme apex had already been lost; somewhat glassy corneous, smooth and glossy, with very convex whorls and a deep suture; on the end of the protoconch there appearing shouldered and plicate nepionic whorls; the base of the last whorl with a flat disc, very much like that of some *Chemnitzia* group of *Turbonilla*, the outer margin of the disc is distinct, weakly carinated on the infra-peripheral portion; on the disc there is no varicial rib and no umbilical perforation; aperture subquadrately circular, outer lip thin and simple, parietal margin covered by a thin callus; columella arcuate with the callus reflected, widely dilated on its upper insertion, basal margin slightly dilated below. Coloration: besides stated above there is, at the top of each whorl, a pale orangy brown zone, with another stain on the basal disc. Though the surface is smooth and glossy but a few indistinct fine spiral groovings are seen, especially also on the disc.

Figured type specimen has the dimensions: alt. 15. 2, diam. 4.3 mm., with $11\frac{1}{2}$ whorls, but there have been collected much larger individuals, viz. 25×6 mm. with 14 whorls.

Type locality: off Tosa Bay, Shikoku, collected by Akibumi Teramachi. It has a rather wide range of distribution from Goto Islands, west of Kyushu to Kii Peninsula on the east.

Operculum shortly ovate, paucispiral, dark transparently corneous, outer margin narrowly stained with a pale brown.

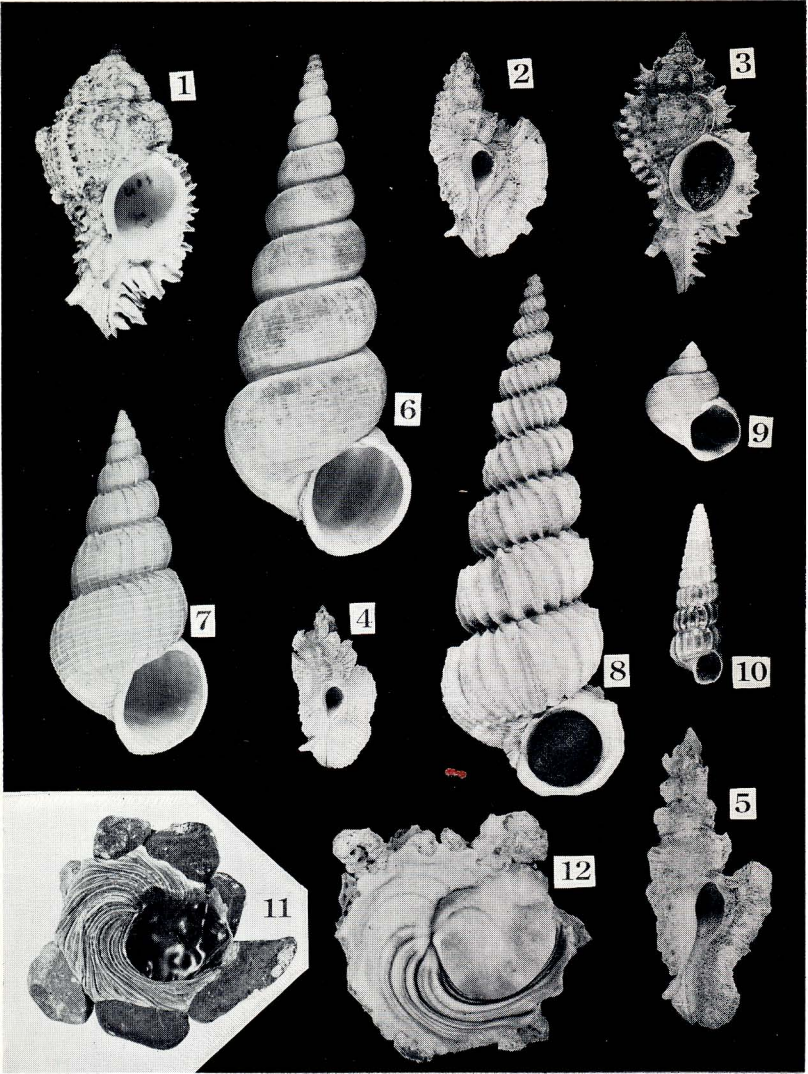
"*Scala*" *humerosa* Schepman in the Siboga Report seems to have some resemblance with this, but the nature of the ribs differs. The unique species is at present the type of this new genus.

第 16-18 図 版 説 明 Explanation of Plates 16—18

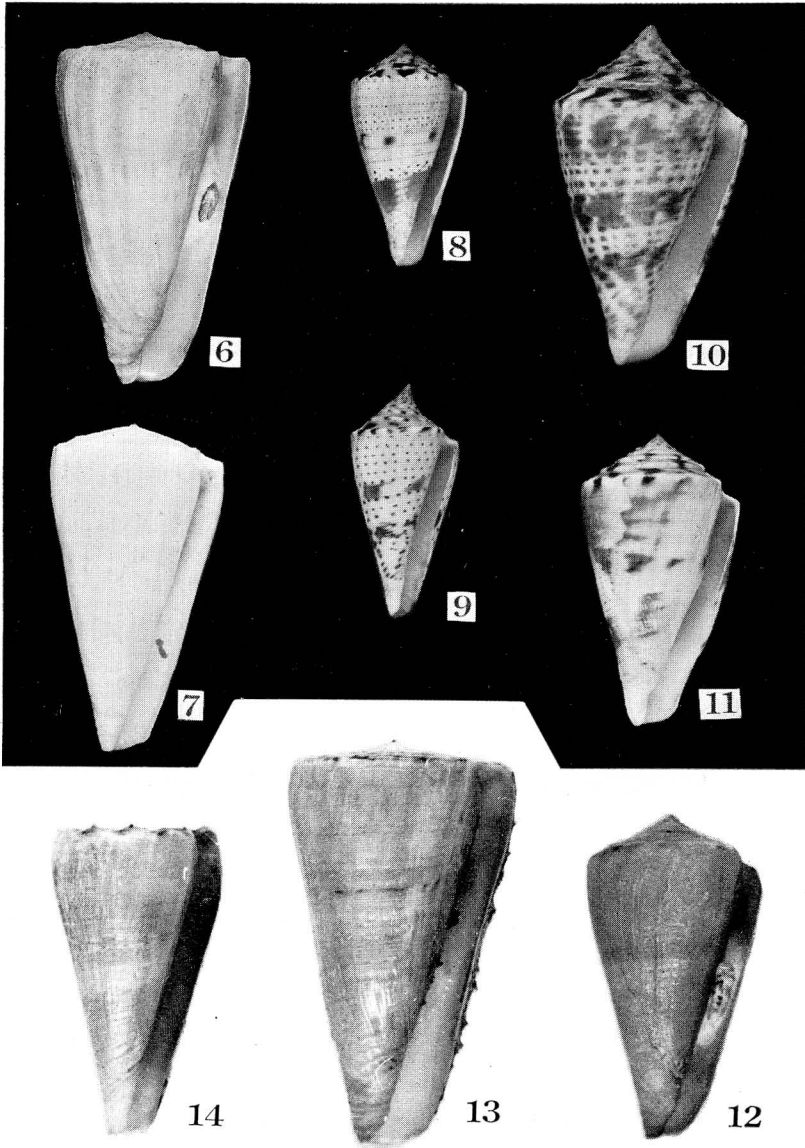
- Fig. 1. *Chicoreus laciniatus* (Sowerby) カザリガンゼキ. 75.0×40.0mm. Nada, Kii Peninsula, collected by K. Ito.
2. *Pterynotus pellucidus* (Reeve) ヒレビロバシヨウ. 47.7×26.2mm. Nada, Kii Pen., collected by K. Ito.
3. *Chicoreus superbus* (Sowerby) オガサワラガンゼキ. 63.9×34.6mm. Western part of Tosa Bay. 9 螺層, collected by K. Kurohara.
4. *Pterynotus tripterus* (Born) チヂミバシヨウ. 41.3×21.0mm. Nada, Kii Pen., collected by K. Ito.
5. *Pterynotus (Marchia) elongatus* (Solander) カラスキ. 73.0×28.0mm. Kii (collected by T. Yamamoto). 8 + 螺層.
6. *Amaea secunda*, n. sp. ツギノナガイトカケ. Type. 59.0×21.2mm. 11 螺層 [頂部 3~4 層欠如] (collected by K. Kanda).
7. *Amaea magnifica* (Sowerby). An immature specimen from Tosa Bay. ナガイトカケ未成殻, 40.4×17.8mm 11+螺層, (collected by A. Teramachi)
8. *Cirsotrema (Elegantiscala) rugosum* (Cahn, MS.), n. sp. ヤエバイトカケ 61.0×21.0mm. 11 螺層, 頂部欠如. Type. Off Tosa. (collected by A. Teramachi).
9. *Teramachiacirsa annulata*, gen. et sp. nov. テラマチイトカケ (吉良). Type. 14.6×11.9mm. 7 螺層. Off Tosa (collected by K. Kurohara).
10. *Lampropalia nitida*, gen. et sp. nov. ミガキイトカケ. Type 15.2×4.3mm. 11 ½ 層. Off Tosa (collected by A. Teramachi).
11. *Xenophora torrida* Kuroda & Ito, n. sp. コゲクマサカ. Type. (diam. excluding pebbles) 38.0×alt. 34.0mm. Nada, Kii Pen. (collected by K. Ito).
12. *Xenophora corrugata* (Reeve) シワクマサカ (内山, em) Off Tosa, (diam. exclud. adh. mat.), 54.0×alt. 41.0mm. (collected by K. Kurohara).

Plate 17

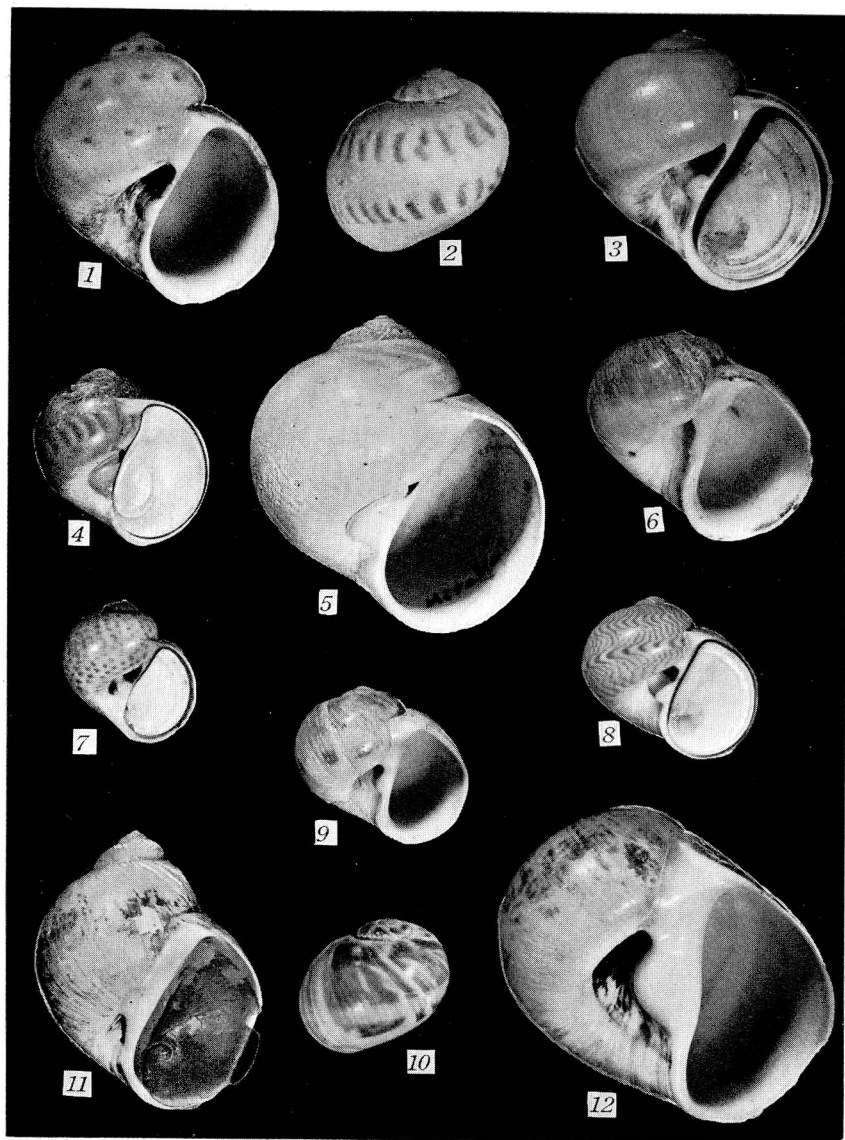
- 6, 7. *Conus (Rhizoconus) gloriakiensis* Kuroda & Ito, n. sp. ミカンイモガイ 6. (Paratype) 61.2×34.0mm. 7. (Type) 51.7×27.7mm. Nada, Kii Pen., (collected by K. Kanda).
8. *Conus (Endemoconus) otohimeae* Kuroda & Ito, n. sp. オトヒメイモガイ Type, 27.2×14.0mm. Nada, Kii Pen. (collected by K. Ito).
9. *Conus (Endemoconus) ione* Fulton, an immature specimen for com-



KURODA & Itô: Molluscan Shells from Southern Kii



KURODA & ITÔ : Molluscan Shells from Southern Kii



KURODA : New Japanese Naticidae

- parison, イナズマアコメ, 未成殻 (比較のため), 31.0×14.0 mm. 11 螺層. Tosa (collected by A. Teramachi).
10. *Conus japonicus* Bruguière ニッポンイモガイ. 36.2×20.5 mm. Tatsugahama, Kii Pen. (collected by Y. Toki).
- 11, 12. *Conus (Rhizoconus)* sp. [not described in this report].
- 13, 14. *Conus (Rhizoconus) urashimanus* Kuroda & Ito, n. sp. ウラシマイモガイ 13. Type, 70.0×37.5 mm., 14. Paratype, 47.8×26.4 mm. Nada, Kii Pen. (collected by K. Ito).

Explanation of the Japanese Naticidae illustrated here which was newly described in the previous number of this journal, Vol. 21, no. 2, pp. 123-135. March, 1961.

- Plate 18. figs. 1, 2. *Natica tosaensis* Kuroda, p. 125. トサダマ. 1. Type, 33.0×29.0 mm.; 2. Paratype, dorsal aspect, 23.7×21.8 mm.
3. *Natica tabularis* Kuroda, p. 126. シンダマ. Type, 31.0×30.0 mm.
- 4, 5. *Tectonatica ranzii* Kuroda, p. 129. ランジダマ. 4. Paratype, slightly young specimen, with the operculum, 20.0×18.7 mm.; 5. Type, 38.0×34.5 mm.
6. *Natica lacteobasis* Kurda, p. 123. シロスソタマガイ. Type, 26.0×27.5 mm.
7. *Natica shoichiroi* Kuroda, p. 127. ヤマネコダマ. Type, 15.7×15.0 mm.
8. *Natica tenuipicta* Kuroda, p. 128. カンゼミズダマ. Type, 17.8×18.5 mm.
- 9, 10. *Natica nipponensis* Kuroda, p. 124. ニッポンタマガイ. 9. Type, 18.0×18.3 mm.; 10. Paratype from Mishima, Japan Sea, dorsal aspect, 14.5×16.8 mm.
11. *Lunatia plicispira*, Kuroda, p. 130. キザミタマツメタ. Type, 33.3×26.2 mm.
12. *Polinices vestitus* Kuroda, p. 131. キヌカツギタマツバキ. Type, 38.0×37.0 mm.